

「何事であれ、そこにはつねに、それ以上のことがある」

《考えられる限りの文学の概念——社会参画としての文学、個人の精神的充実の追求としての文学、国民文学、世界文学——はすべて、精神的な自己満足、虚栄、あるいは自己満悦の一形態である、あるいは、そうなる可能性をはらんでいる。

文学は体系、多元的な体系である。基準、志、忠誠心の体系。文学の倫理的な機能には、多様性の価値という教訓も含まれる。

もちろん、文学の活動はしかるべき境界内にとどまらざるをえない(すべての人間活動がそうであるように。境界のない唯一の活動は、死という状態だろう)。問題は、ほとんどの人々が引こうとする境界線というものが、文学が創意を振り絞り、自己喚起力をかきたてて、文学としてありうべき存在になろうとする自由を圧殺してしまうことだ。

私たちは、統一化という欲望にかられた文化のなかに生きており、世界の膨大な、輝かしい言語の複合体のなかのひとつ、私が語り、書く英語という言語が、いまでは支配的な言語となった。世界的規模で、また世界中の国の圧倒的多数の人々にとって、英語は、かつて中世ヨーロッパでラテン語が果たしたのと似た役割を果たしている。

だが、ますます世界を覆い、民族の境界を超えてゆく文化に住んでいながら、私たちは、現実の部族、ないしは新興の部族が唱える、ますます断片化する権利主張に溺れそうになっている。古い人間主義の理想——文芸共和国、世界文学といった理想——は、各地で攻撃されている。人によっては、それらの理想は単純で素朴すぎるし、また、大ヨーロッパの普遍的価値という理想——ヨーロッパ中心主義の理想と言う人もいる——という出自が汚点となっている、と考えている。

「自由」や「権利」の概念は、近年、著しく退化してきた。多くの共同体では、個人の権利よりも集団の権利のほうが重視されている。

そういう観点から、文学の作り手たちが行なっていることについて考えてみよう。自由な表現、そして個人の権利、それらの信憑性を強化することは、暗在的にはあるが、可能なものではないか。たとえ文学の作り手が、自分が属する部族や共同体に奉仕する作品を捧げた場合でも、そうした奉仕の目的を止揚すれば、作家としての功績を果たすこともありうる。

一人の作家の価値や素晴らしさを決める特性はすべて、その人の個としての声のなかに突き止めることができる。

だが、この単数性は私的な生活において培われ、また孤独な、長い省察の修行期間を経て初めて獲得できるものであり、それはまた、作家が使命を感じて社会的役割を果たそうとしたとき、絶えず試練にさらされる。

公共的な問題の討論に参加したり、考えの近い他者と共通の目標を設定し、連帯を図る。作家には当然その権利があると思う。

また、そうした活動によって、作家は文学の創造の場である孤塁、特異な内なる場所から遠ざかってしまう、と主張するつもりもない。生きている身にまつわる他のほとんどすべての活動も、その意味では、同じような作用をする。

だが、公共の討論や行動への参加は、良心や関心の命ずるところに突き動かされ、みずからの意志で行なうことであり、それは、要請されたからといって、意見を捏造すること——道学者気取りの、メディア向けの識者のコメントのたぐい——とは、一線を画する。

「いや、私自身はそこには行っていません、それはやっていません。けれども、これは賛成、あれは反対」。

けだし、作家はこういう意見表明機^{オピニオン・マシーン}になってはならない。アメリカのある黒人の詩人の話だが、自分と同じアフリカ系アメリカ人たちに、人種主義の屈辱についての詩をなぜ書かないのかと責められて、「作家はジュークボックスじゃない」と答えたという。

作家の第一の責務は、意見をもつことではなく、真実を語ること……、そして嘘や誤った情報の共犯者になるのを拒絶することだ。文学は、単純化された声に対抗する、ニュアンスと矛盾の住み処である。作家の職務は、精神を荒廃させる人やものごとを人々が容易に信じてしまう、その傾向を阻止すること、盲信を起こさせないことだ。作家の職務は、多くの異なる主張、地域、経験が詰め込まれ

た世界を、ありのままに見る目を育てることだ。

さまざまな現実を描写すること、それも作家の仕事だ。汚れた現実、歓喜の現実。文学（文学の功績という多元的なもの）が供する叡智の精髓は、何が起きていようと、つねに、それ以外にも起きていることがある、という認識を助けることだ。

この「他にも何か」ということが、私の頭を離れない。

自分が大切にしている諸権利やさまざまな価値の相克に、私はとりつかれている。たとえば、ときとして、真実を語っても正義の増大にはつながらない、ということ。ときとして、正義の増大が真実の相当部分を押さえ込む結果になるかもしれない、ということ。

20世紀のもっとも注目すべき作家たちの多くは、公共の声としての活動において、正義の目的だと自分なりに信じていたこと（多くの場合は、本当に正義の目的であった）を助長するつもりが、実際は真実を抑圧する共犯者の役回りに陥ってしまった。

私自身の見解は、もし真実と正義のどちらかを選ぶとしたら——もちろん、片方だけを選ぶのは本意ではないが——真実を選ぶ。

言うまでもなく、義憤にかられた行動というものを私は信じている。だが、行動する人、それは作家だろうか。

三種の異なる事柄がある。いま私が行なっている話すこと。そして書くこと、そのおかげで、この稀有な賞を受ける何らかの権利が私にも生じている。そして存在すること、それによって私は、他者との能動的な連帯を信じる人間としてある。

かつてロラン・バルトが看取したように、「……話す人は書く人ではなく、書く人は存在する人ではない」。

もちろん私は意見、政治的意見をもっており、その一部は実体験ではなく、ものを読んだり議論したり、また思考したりしたことが基盤になっている。私の意見、そのうちの二つをここで述べたい。直接的な知識を有する問題について私がこれまでとってきた公然とした立場からすれば、じつに予想のつきやすい意見だ。

集団的懲罰の根拠としての集団責任という原則は、軍事的にも倫理的にも、けっして正当化しえない、と私は信じている。何を指しているかと言えば、一般市民への均衡を欠いた火力兵器攻撃、彼らの家の解体、彼らの果樹園や農地の破壊、彼らの生活手段と雇用、就学、医療、近隣市街・居住区との自由な往来の権利の剥奪である……。こうしたことが、敵対的な軍事行動に対する罰として行なわれている。なかには、敵対的軍事行動の現場とは隔たった地域の一般市民に対して、こうしたことが行なわれているケースもある。

私は以下のことも信じている。自治区でのイスラエル人の居住地区建設が停止され、次いで——なるべく早期に——すでに作られた居住区の撤去と、それらを防衛すべく集中配備されている軍隊の撤去が行なわれるまで、この地には平和は実現しない、と。

これら二つの意見は、この会場にいる多くの人々の意見でもあろうと確信している。アメリカの古い言い回しだが、聖歌隊に説教を聞かせているようなもの〔日本流には、釈迦に説法〕だと、心得ている。

ところで、これらの意見は、作家としてのものだろうか。あるいは、私は作家という立場を利用して、同意見の人々の声を増大させるために、良心をもつ一個人としての自分の声を重ね、補強しようとしているのではないのか。作家が及ぼしうる影響は、付随的なものにすぎない。いまやそんなものは、有名人偏重文化の一要素にすぎない。

みずからは十分な直接的な知識をもっていない事柄について、意見を公に広めることには、何か卑しさを感じる。自分の知らないこと、あるいは拙速な知識しかもたないことに関して語ることは、コメント屋への墮落だ。

この講演の冒頭に立ち戻れば、私はいま、名誉の問題としてこのことを語っている。文学の名誉。個としての声をもつという企図。真摯な作家、文学の作り手なら、マスメディアの覇権的な言説とは一風変わった流儀で自己を表現すれば、それで事足りる、とたかを括ってはならない。ニュース番組やトークショーのダラダラとした仲間うちのおしゃべりに、反対しなければならない。

意見というものの困った点は、私たちはそれに固着しがちだ、ということである。だが、作家が作家として生き生きとしている限り、作家はつねに見ている、しかも、より多くのことを。

何事であれ、そこにはつねに、それ以上のことがある。どんな出来事でも、他にも出来事がある。》

